◆ 第五話 **雪 舟 庭** (昭和29年9月20日掲載)



雪舟はずいぶん長い間、かれこれ二時間近くの間、耶馬渓奥中詰の里わし岩の景色をあかず 眺めているのでした。

それもそのはずです、この付近の景色があまりにも等揚と云っていた小僧の時代に過ごした備中岡山の宝福寺で修行中によく出かけて行った豪渓の景色にあまりにもよく似ていたからでした。

雪舟は住持の老僧から叱られて縄でくくられ、涙でねずみを画いた子供の頃の事を思い出しました。

それから絵を描くことが許され、まきたに川を二里ほどさかのぼった所にある豪渓まで、老僧の目をぬすんでは、出かけて行き、絵を描いたものであります。その頃は、ただ両岸の山々が、鋭く突き立っている景色、谷川の清水画、ちょろちょろとかすかな音をたてている流れの、その自然の美しさを見るために行ったようなものでありました。

又、応仁二年(1468年)、建仁寺の清啓和尚と共に親善使僧として明に渡った時の、寧波の東、大白山の天童寺付近の景色にも似ていると思いました。ここで天童<u>第一座</u>となり、中国でも、夏珪、馬遠をしのぎ、当代随一と称されたのであります。

三年の後、帰朝したのでありますが、室町にある北の御所や、北山の金閣寺などのある、華やかな京都にそのまま住む気持ちには到底なれなかったのであります。

曽我蛇足軒、啓書記、秋月、雪村など、いずれも京都でおしもおされもぬ、大家として一家の産をなし豪華な邸宅を構え、豪奢な生活をしているのでありますが、雪舟にはこうした人々のように後ろ盾になってくれる権力者を求める事を好みませんでした。

足利将軍を、応仁の乱を起こした大罪人として、その庇護を断ったのですから、如何に清廉潔白を信念としていたかがわかります。平和を愛し、自然美を探究し、本当の芸術に生きる雪舟には世間の人々がもてはやせばもてはやす程、良心の呵責に苦しむのです。

過去の大和絵の画法に飽き足らず、墨一色を持って、山水を描く道を新しい絵の道を切り開こ うと云う気魄が烈々と胸に燃えているばかりです。

遠江から鎌倉へと諸国を流浪して、古今の名画を描写して歩きました。粗末な墨染めの法衣を まとい、笠を目深にかぶって歩いている姿は、平凡な托鉢僧としか思えません。それだけに雪舟 は、いっそう気持ちがのんびりとして旅を楽しむ事が出来るのです。然しこのにごりきった世の 中に、自分だけが清く正しく生きようとする事がどんなにむつかしい事でしょう。雪舟は逃れ逃れ、落ちぶれおちぶれて、ここまで来たと云っても、云い過ぎではありません。

絵を描いたら古今無双です。その上当代屈指の学僧です。天才であり努力家である雪舟が、周防、長門から豊前(大分)と放浪し九州の耶馬渓おく、中詰の里までたどりついたのです。思えば時代に合わない芸術家ほど哀れなものはありません。雪舟の平和の心、正しい心がそうさせたのです。

「宋元画(そうげんが)の値打ちは、墨一色で雄大な世界を書き現わす事だ」。この鷲岩のように・・・とそう思いながら、あかず眺めている様子は、「宋元画」第一の画家ではなく、ただ一筋に美術に精進して悩み苦しんでいる一介の老僧の姿であります。

「わしの一生は雲水でいいのだ。わしは、わしの思い通りの省筆破墨の画法さえ、完成すればいいのだ。」と一人つぶやきながら、白水(しろみず)の亭へ帰って行きました。

いつものように、小さい阿弥陀を安置してある、机に向かって座りますと、長い間想を練りました。それから一点一劃(一点一画)でも、絶対にゆるがせずにせず、精魂を傾けつくしている 雪舟の筆先からは血がほとばしり出るような、鋭さがありました。

文明七年、雪舟が五十六才の時に、豊後の国大分の郊外上の原に居を構えて、天開図画楼と称したのでありました。まもなくそこを立ち去り、長元年の六十八才までの大部分をこの白水の庵室で過ごしたのですから、はじめて静かな生活に入って画業に専念したのではないかと思います。そして夜は、自分で丹精を込めて作った築亭を眺めながら、好きな酒を飲んで、いい心持ちになりますと、尺八をろうろうと吹いて、その余韻を楽しんだのであります。(完)